

〈翻 訳〉

## 教養としての教養体育

金 炫勇 訳・崔 義昌 著

(受付 2019年10月23日)

### はじめに

体育授業が国内のほとんどの大学で開講されているのは世界でも希少であるが、東アジアの日本・韓国・台湾では、今もほとんどの大学で体育授業が開講されている。そこで、筑波大学の体育スポーツ高度化共同専攻は、日本・韓国・台湾における大学体育の実態に関する相互の情報共有の場として、「日韓台大学体育研究フォーラム」を開催した。本稿は、二〇一九年二月「日韓台大学体育研究フォーラム」の韓国側の発表者・崔義昌教授（ソウル大学校，韓国スポーツ教育学会会長）の発表原稿，「教養としての教養体育」（교양으로서의 체육교육）を日本語訳したものである。崔義昌教授は，韓国の大学における教養体育の実態と，その解決策を探っており，韓国大学における体育授業の実態を把握する手がかりとなる。

### 1. 大学における教養体育の萎縮

近年韓国では学校体育への関心が高く投資も活発に行われている。これは一時的な現象ではなく，長期にわたって続いている。また中学校の体育授業が増え，スポーツクラブも拡大している。この現象について，「真夏の夕立のように一時的な増加に過ぎない」と思っている人もいるが，中学校における体育授業の増加やスポーツクラブの拡大は今後も続く見込みである。さらに，正規の体育授業，クラブ活動，放課後活動，学校の運動部，土曜スポーツデーなど，学校における体育のプログラムは多様である。

これは，韓国の大学における体育の現状からみれば，うらやましいかぎりである。韓国における学校体育の範囲は小学校から高校までで幼稚園や大学は入らない。政策的に学校という範疇は小学校，中学校，高校までに限られている。大学も学校という用語が入るにもかかわらず，一般的に学校という範疇から除外される。このような現状から大学体育への関心や投資は注目されず，名前だけの大学体育になっている。

しかし，大学体育の種類は少なくない。大学体育には体育授業としての教養体育をはじめ，学校の代表運動選手が行う運動部体育，一般学生のクラブ活用（韓国名はトンアリ，동아리）

など、各種の体育行事がある。また大学体育は学生たちから人気が高いにも関わらず、大学からの支援はほとんどない。そのため、学校側が支援する学校代表運動部以外は、維持するだけでも大変である。そして、教養体育の授業は最小限に維持されており、またクラブ活動は学生たちの自発的な運営に頼って解体を免れている状況である。

このような現状の中、筆者（崔義昌、以下同様）が目にするのは、体育授業としての教養体育である。韓国のほとんどの大学において教養体育は、一般教養の一つとして自由に選択できるもので、その中身はサッカー、バスケットボール、水泳、ダンスなど、身体活動を中心とした種目である。また教養体育には健康と栄養、スポーツと社会など、体育の理論科目も含まれる。だが、韓国において教養体育とは、一般的に実技を意味する。一方、教養体育は他の教養科目に比べ、その内容が貧弱である。そのため、学校側からみれば、教養体育の人気は高いものの、その価性比（価格対比性能の比率）は低いものである。つまり、学校側は投資に比べ、算出（利益）が少ないと思われる。

韓国の体育授業は一般的にクラス20～30名である。体育授業は講師一人に100名から200名まで教えられる理論系の教養授業に比べ、講師への人件費が高くつく。また空間活用率からみても、いろんな科目を教えられる講義室に比べ、体育館は場所として限られた活動しかできない。室内体育館では水泳、体力増進、サッカーなどはできない。教養体育は非効率的であり、学校側からみれば課題である。よって、学校側は最小限の講座だけを提供しようとしている。学校側は体育授業という形だけを維持しており、韓国の大学の教養体育が直面している課題である。

ところが、なぜ、このようになってしまったのか。筆者が大学に通っている時代は、教養体育は少なくとも週2コマ（その以前は週4コマの時期も）はあった。だが、最近韓国における大学の科目は必須という概念がなくなり、包括的な選択として捉えられている。これは学生たちの教育・教科に関する選択肢を広げるための政策である。ソウル大学の場合、「核心教養科目」から本人が好きな科目を10コマ受講すればいい。しかし、残念ながら、核心教養科目の中に教養体育は入っていない。核心教養科目は人文、社会、自然科学の分野などが中心になっている。そして、体育は芸能体育系科目の中に含まれている。芸能体育系科目は必須ではなく、選択科目であり、大学在学中受講してもしなくてもいい中等半端な科目に属する。

このように、韓国において教養体育は完全に選択化されている。しかし、教養体育は学生たちにもっとも人気の高い授業の一つである。20代の若い青年たちは、とにかく教養体育を受講する者が多く、インターネット上で受講申請がスタートするやいなや申し込みはすぐ終了してしまう意気込みである。このような状況にも関わらず、大学は教養体育の数を増やさない。もっと正確に言えば、増やせない側面もあり、増やさない側面もある。前者は財政的

負担が理由であり、後者はそれほど必要な講座として捉われていないからである。

このように、教養体育は大学で学生たちが修得すべき講座の優先順位から考えると最下位に位置づけられる。このような現状について、「非常に残念であるが、大学は専門知識と力量を修得し涵養するところであることを考えると、教養は最小限に提供するしかない。学生たちが大学に進学した目的は専門を身につけるためであるから」と、大学の関係者はいう。これは教養体育の最小化が正当化される主な論理的根拠である。大学の関係者の話からは、学生たちがクラブ活動をしたり、生活体育としてフィットネスや体育施設に通えばいいという考え方がうかがえる。

また大学側は財政的な理由を挙げながら、「新しく提供しなければならない最先端の知識と技術を扱う講座が多すぎて、教養体育まで考える余力がない」という。さらに、「(社会において)生活体育が日常生活の一部になっている今日、教養体育は教養としての地位を失った」と指摘したうえ、「教養体育は大学の中で必要性が尽きた科目だ」と主張する方もいる。しかし、この二つの主張は、コインの両面のように、二つそろって一つの実体であると思う。つまり、大学側は大学で教えるべき知識や能力について、実用主義かつ実利主義的に捉えている。言い換えれば、あふれ出る知識の最先端に立ち続けるか、就職戦線で使える有用なもの(知識)を身につけるようにしなければならない、という考え方に基づいている。

このような大学の態度によって、一番大きな被害を受けるのは体育である。大学の体育教育に対する韓国の大学の立場は、今広がりを見せている小学校から高校までの体育の繁盛とは相反するものである。このような考え方は体育をもっと萎縮させ、枯死させることにつながりかねないと思う。今日韓国の大学では教養体育が絶滅とはいえないが、保護種のレベルまで急激に縮小されている。また提供される講座が極めて少ないため、学生たちの要求や多様化に対応できない状況である。言わば、教養体育という貧弱なバイキング食事の前で選択肢が簡素化された実技授業だけを提供するようなものであり、これは憂慮する事態であるといえよう。

ところが、筆者の関心事は教養体育の活性化ではない。また、このような貧弱な状態から少しでも教養体育の講座数を増やすことでもない。この課題については、すでに多くの方によって提案が出され、若干の現実的な処置(改善)もされている。だが、現場を見る限り、予想通り改善されず、状況はより悪くなる一方である。教養体育の現況が改善されないことは今までの関心や努力があまり効果ないという証拠である。大学の財政悪化や費用節減という巨大な津波の前で、教養体育という砂上の楼閣が耐えられないのは当たり前のことである。

筆者は砂上の華麗な楼閣よりみたくは良くないけれども丈夫な石づくりの建物を建てたいと思う。教養体育を大学教育のあってもなくてもいい、付随的なものではなく、大学教育の核心、あるいは必須要素として位置づけたい。そのためには、人(大学側)を説得する必要

があり、また事態を変える以前、自ら現状を理解する努力をする必要があると思う。そうならば、教養体育の重要性を叫ばなければならないとき、より確信をもって説得力のある説明をすることができるはずである。

ところが、筆者の願いはそれほど大きくない。反論に対応できる論理体系を作ることでもない。筆者の願いは筋が通っていない話かもしれないが、打開できるアイデアや構想をねって、自分に聞かせようとする、小さな思いによるものである。これは、素朴な一步に過ぎない。しかし、5秒で第一印象が決るように、短い構想の中には課題を打開するカギが潜んでいるかもしれない。そのためには思考の方向や正しい論理の展開が前提になる。結局、今後の努力は正しい方向性や正しい論理展開にかかっていると思う。つまり、教養体育に関する今までの関心や議論は正しい方向性や正しい論理展開にかかっている。従来の関心は教養体育の劣悪な現況を数字（統計）中心に把握し、講座の規模や受講人数を増やすことばかりに焦点を当てており、教養体育自体に対する概念的かつ根本的議論はほとんどみられない。なお、大学教育の一部分として教養体育に対する哲学的省察もみられない。特に教養体育の教養的性格に関する質問、すなわち体育が教養教育に含まれた教育的理由とは何かについての省察がみられないのは残念である。本稿は、その本格的な努力のスケッチや骨組み作りである。また教養体育の性格、あるいはアイデンティティに対する根本的な再検討へのスタディー(study)としての性格を持つものである。

## 2. 基礎としての教養体育

スタディーといったが、学術的根拠を探ることからはじめるつもりはない。なぜなら、本稿は学術論文ではないからである。むしろ常識レベルで理解できる議論を展開していきたい。特に単語や用語を日常から取り上げ、根本的な課題を解いていきたい。ギリシャの哲学者ソクラテス(Socrates)は、日常の中から根本的な課題を解いたので哲学の父と呼ばれている。たとえば、プラトン(Platon)の対話編(dialogue)をみると、日常の用語を用いて哲学の根本課題を解こうとするソクラテスと他の哲学者の話であふれている。教養体育の大学教育としてのアイデンティティに対する哲学的課題もこのようになるべきである。これを専門的用語や学術的根拠を用いて裏付けることは専門哲学者の仕事である。筆者はただ自分の常識や経験を上手く活用して述べていきたい。

まず、体育の教養教育としてのアイデンティティとは何か。ところが、この問いは正しいのか。大学における体育はなぜ教養教育として認められているのか。教養教育としての性格や特徴とは何か。これらの問いの共通点は、体育がなぜ教養体育として呼ばれているのかということである。また、これは大学の教養体育の中で体育が占めている位置の正当性に関する

る問いでもある。なぜ大学生たちは大学で体育を学ぶのか。なぜ体育を教養教科として学ばなければならないのか。これらはすべて原理的な問いであり、行政的措置をとおして教養体育の講座数を増やすことを超える、根本的な問いである。

また、この問いには、大学の目的、大学教育の性格、そして教養教育の本質と関連した複雑な原理的かつ教育的議論が隠れており、教養体育に対する議論は、このような脈絡の中で議論されるべきである。しかし、上記で述べたように、本稿は哲学的なレベルでの議論ではなく、筆者の考えを常識的なレベルで展開して行くものであることをもう一度述べておきたい。このような概念的議論は後にして、単刀直入的に教養体育の性格とは何かに答えたい。この問いには大学の目的、大学教育の理想、教養教育の本質に対する考え方も含まれる。

それでは、教養体育を三つの観点から述べて行きたい。まず、一つ目は著者が体育の教員として教養体育を教え、運営してきた経験からの観点である。そして、二つ目は、スポーツ教育専攻教員として体育教育について学んできた自らの経験からの観点である。そして、三つ目は、教養教育の根本性格について悩んできた大学教員としての観点である。この三つの経験に基づいて教養体育の教養的性格について述べて行きたい。

まず、一つ目の観点ですが、教養体育は教養人としての基本知識（運動能力）を身につけるためのものであると思う。大学の機能の一つに、大学の外では習えない大学人としての基本知識を習得させるという役割がある。つまり、大学を出た教養人として自分の専攻知識以外に揃えるべき基本知識や基本機能を習得させるという役割があり、大学はこの内容を教養科目という名前で提供している。国語、英語、世界史、数学のような知識科目、そして音楽、美術、体育のような技能芸術科目がその代表的な例である。ところが、これは韓国社会が知識的にも文化的にも劣悪だった1990年代以前の考え方である。経済的に恵まれていなかった筆者は、テニスを大学に入学した1982年にはじめて経験した。また、水泳を本格的に習ったのも大学の水泳授業である。もちろん泳ぎは覚えていたが、水泳の本格的な4泳法ではなく、ただ自分勝手に泳ぐレベルだった。

このような概念としての教養体育は基礎科目（基本体育）というプログラムの名称によくあらわれている。大学は、「Basic Activity Program」あるいは「Basic Physical Education」と呼びながら、学生たちが今まで経験したことがない新しい活動を提供する。この立場からみれば、教養体育とは、その言葉とおり、基本レベルの内容を味見させる体験型の授業である。よって、教養体育は社会人になったとき、必要な基本知識や機能を少しでも正しく修得させるものである。そして、学習過程は主に技能の向上を目標としている。よって、科目名称もバスケットボール、サッカー、ダンス、体力鍛錬など、実技種目の名称になる。そして、内容も技能習得とゲーム活動が中心である。

これはほとんどの韓国の大学で行われる教養体育の中身である。大学は専門知識を学ぶ理

論活動が主をなしているため、その反対活動、すなわち実践的活動をとおして心と体のバランスの取れた学生として成長させたいというのが基本前提である。そのうえ、今日の韓国社会ではスポーツ活動が重要な教養活動の一つとなっているため（たとえば、韓国ではゴルフが上手くないと事業が上手く行かないという俗説が広がっている）、大学在学中に社会で使えるスポーツを学んでおくという考え方も働いている。最近では韓国における教育、生活、文化環境などのレベルが改善されたため、スポーツ経験が豊富な学生たちが入学してくる。だが、エアロビック、ダンス、柔道、剣道など、未だ習ったことのない新しい種目を味わうことができるのも大学の教養体育の醍醐味である。

このように教養体育の性格を技能講座、社会人生活に役立つ新しい技能を修得する体験機会として捉える考え方にはメリットもある。しかし、このような考え方はむしろ大学が教養体育を縮小するきっかけを提供する。なぜなら、この考え方には、「近年社会環境がよくなり、学校の外で多様なスポーツ体験をするチャンスが広がっている。新しい知識の急激な増加によって、大学で学ぶべきものが多く、劣悪な財政によって制限された教育プログラムを提供するしかない現実の中では、体育活動を学校の外で修得するしかない。学校では最小限の機会を提供することしかできない。よって、このような事情の中にもかかわらず教養体育を開設する大学側に感謝すべきだ」と、いう、大学側の論理が働いているからである。しかし、社会で簡単に経験できない種目が提供できる大学は、ランキング10位に入る大学以外には非現実的な話である。また、このような方針で教養科目を概念化する大学も非常に少ない。単純に新しい技能として教養を規定し、それを学ぶ機会として教養科目を決める考え方は、21世紀財政圧迫がピークに達した大学教育では堅持し難い考えである。

### 3. マナーとしての教養体育

教養体育が抱えている問題は現実的な圧迫だけではない。教育的観点からみても同じである。単純に新しい知識や情報を修得させることだけが大学に許された教育の使命ではない。もちろん、そのような学びも必要であろう。しかし、大学は芸芸や技術だけを学ぶところではない。むしろ技能的な学びは最小限にするべきである。

そして、二つ目の観点は、教養をマナー、あるいは品格と関連付けたものである。われわれは日常で、「教養がない。教養がある。教養が欠けている。教養ある行動をしなさい」という言葉を耳にする。これは思考と行動の品格に関する内容である。すなわち、「マナーがない。マナーがある。品がある。品がない」という意味である。さらには、「これは高級だ。上品だ」という意味でもある。英語の *cultured*（教養ある）という単語を考えてみよう。*cultured* には「洗練された。水準が高い」という意味も含まれている。

このような意味で教養体育を、品がある（上品）体育，ブランド体育として考えることができる。習う人にマナーを身につけさせる体育，習えばマナーが身につく体育，またはマナーを守りながら習う体育のことである。このような体育は品があり，上質の体育になる。マナーやルールを無視した体育とは違うものである。二つ目の観点の教養体育は，まるで教養文化のように習うことによって習うものの品格を上げるような活動であり，日常では習えない高級体育を大学で学ぶという意味を持つ。もちろん，この意味としての教養体育は，21世紀のわれわれから考えると受け入れ難いところがある。体育を高級文化として捉える態度は，おそらくスポーツの本土といえる19世紀のイギリスとヨーロッパの貴族文化，またはエリート文化に似ている。余暇時間と活動を十分に嗜むことができた19世紀のイギリスとヨーロッパの貴族はマナーと品格を高め現せるみせ場として体育を活用したのである。たとえば，特定階層の占有物であったテニス，ヨット，フェンシング，乗馬，陸上など，ヨーロッパでスタートしたスポーツ活動を考えれば理解できる。アマチュアリズム（amateurism），スポーツマンシップ，そしてフェアプレイなどの理想は，このような観点から生まれ形作られたものである。

しかし，誤解しないでほしい。筆者は教養体育を非教養体育として位置づけるつもりはない。また，小学校から高校まで習った体育や生活体育で習った体育とは質が違う高級体育としての意味を強調したいことでもない。ただ教養の意味で，習う内容と目的に対する水準，品格，質に対する判断という考え方を示したいだけである。上記で述べた一つ目の観点では，価値，質という考え方は考慮せず，ただ新しい活動，内容を体験する意味での教養体育を述べた。つまり，一つ目の観点には高級運動，質の高い活動，洗練されたスポーツという意味は含まれていない。

それでは，バスケットボール，テニス，エアロビクスなどの教養体育は，一つ目の観点到に属する種目なのか。そして，上級バスケットボール，上級テニス，高級エアロビクスなどは，二つ目の教養体育に属する種目なのか。一つ目の観点和二つ目の観点的の差は，後述する講座の内容とやり方によって決るものである。技術の難易度が高いだけで，目的が従来の講座と同じであれば，結局，一つ目の教養体育と変わらない。しかし，これに加えて質，品格，マナーなどをともに提供し学習させるならば，二つ目の教養体育になる。つまり，教養という語彙に含まれた本来の意味に基づいた教養体育は，二つ目の教養体育として認めることができる。しかし，韓国の大学体育で，このような意味で教養体育を提供するところはほとんどない。既存の講座を減らさなければならぬほど財政難に落ちている状況の中，二つ目の教養体育は貴族主義として誤解される可能性が高い。また，空間や受講生数の側面からみれば，投資に対する利益が少ない教養体育を開設するほど教育的に素晴らしい理想をもつ大学の行政家はゼロに近いはずである。

#### 4. *Bildung* としての教養体育

二つ目の観点は、三つ目の観点をつなぐ架け橋としての性格をもつ。では、三つ目の観点とは何か。この観点は韓国の大学体育の中ではみられない観点である。しかし、大学の理想、大学教養体育の理想を想起させてくれる観点である。そのため、三つ目の観点は効率第一主義から厳しい批判を受けるかもしれない。だが、われわれはその理想を確認する必要がある。なぜなら、それは大学教育の理想に基づいたものであり、教養体育の存在理由の一つでもあるからである。

筆者は、三つ目の観点を「*Bildung*」という視点から説明したい。そもそもドイツ語の *Bildung* という概念は、ヨーロッパの社会文化的脈絡から生まれた教育概念である。*Bildung* は、英語で「culture, education, formation, learning」であり、「陶冶, 教養, 人格形成, 育成, 教育」として日本語訳することができる。しかし、訳語はドイツ文化圏で使われるそれとぴったりマッチするものではない。その一例として、教育 (education) に当てはまる「*Erziehung*」というドイツ語の単語がある。そして、*Bildung* の概念により近い日本語は「陶冶」であると思う。陶冶は、人格形成のための努力やバランス感覚のある人間としての成長、そしてそれを目指しての試みを意味する。*Bildung* の本来の意味は存在の完成、あるいはバランスのある完成を意図する場合に使われる。だが、最近筆者が見たヨーロッパの体育学者の著述では、スポーツを上手く教えることの意味として elite-*Bildung* という用語が用いられている。すると、*Bildung* をどのように訳すればいいのか、エリート陶冶、あるいはエリート教育など、悩むが、スポーツが上手くできるように導くこととして捉えたい。これは英米学者たちとは違うヨーロッパの体育学者たちの特徴的な見解である。ヨーロッパの体育学者らは人間の活動をより本質的かつ全人的な観点からみている。つまり、ヨーロッパの学者たちはスポーツが上手いというのは、ゲームが上手いというレベルを超え、人格形成というレベルまで深化させている。もちろん英米学者の見解が狭いという意味ではない。英米にも自由教養教育 (Liberal Arts Education) という伝統がある。これは、古代ギリシャとローマ、そして中世の大学から取り入れた教育の理想であり、人を自由にする教育、あるいは自由な人が受ける教育を意味する。これは自由な行為 (*Artes Liberalis*) であり、召し使いの行為 (*Artes Servile*) とは異なる。古代人は召し使いの行為 (*Artes Servile*) を生きるために仕方ない仕事、すなわち職業的理由として捉えていた。これは糊口之策 (貧しい暮らしの中で仕方ない策の意) であり、現実から仕方ない仕事である。

ところが、人間は動物性という束縛を超えるためには自由な行為が必要である。それはわれわれを肉体的にも霊的にも自由にさせてくれるからである。この自由な行為に属する活動



は、われわれを肉的活动から霊的活动へと導いてくれるものである。また、動物から人間へと変えてくれる。これは古代と中世社会で当然として受け入れられた考え方であるが、現代では制限された考え方である。しかし、自由な行為 (Artes Liberalis) という考え方は、現代においても認められる教育概念である。一般的に小中高の教育では、この概念を維持することはできない。また、大学も理想的な概念を堅持することはできない。

そこで、筆者が提案する三つ目の観点の教養は、Bildung と Artes Liberalis の概念を取り入れた自由教養教育である。これは一人の総体的存在をバランス取れた状態として成長させる活動としての教養体育であり、学生を人間としてより完全かつ全人的存在 (whole person) へと導く、全人体育としてのものである。つまり、健康体育やゲーム体育や遊び体育に止まらない、一歩進んだ陶冶的性格をもつ活動のことである。

このような教養体育は、学生が一人の成人として、また完全な一人の存在として成長できるように導く身体活動である。Bildung としての教養体育は運動活動という媒体をとおして学生たちを自由な存在、完全な人 (whole person) として導く陶冶活動である。しかし、現実大学で行われる体育活動は召し使いの行為 (Artes Servile) として捉われている。つまり、体育活動は学業ストレスの解消、体力の向上として捉えられており、自由教養教育の補助的ものとして扱われている。上記で述べた一つ目と二つ目の教養体育の観点は、体育をあってもなくてもいいもの、存続させる余裕があれば提供してもいいという考え方であった。しかし、三つ目の陶冶的教養体育は、このような考え方を裏返すものである。教養体育が Bildung としての体育になるためには、大学における他の「重要核心教養講座」と同様、必須として提供されるべきであると思う。体育は、大学生たちを完全な成人として成長させるために必ず学習すべきものである。大学で提供されるバスケットボール、水泳、ダンスなど、多くの種目はゲーム中心に止まる可能性が高い。だが、われわれは Bildung バスケットボール、Bildung 水泳、Bildung ダンスを志向すべきだと思う。つまり、教養体育を教える者は陶冶的教養体育の理想を追求しながら、講座の目的、内容、方法などを考慮しなければならない。われわれはただ楽しくゲームをすれば時間が経つし、汗もかくという考え方からより上のものを目指すべきである。

## 5. 教養としての教養体育

一般的に理想と現実とは違う。また理論と実際も同じである。韓国に「法律より暴力の方が利く」という諺があるが、これは現在の韓国大学の教養体育の現住所を現す表現であると思う。これは理想がいくら素晴らしくても、理論がいくら整合的であっても、大学行政の実情と大学財政の現実が与える影響力には勝てないという意味である。教養体育の教育的性格は

上記で述べた一つ目の観点、二つ目の観点、三つ目の観点の順に増していくものである。そのうち、三つ目が大学教育の理想と一番近いものである。しかし、大学教育の現実に一番近いものは、一つ目の観点に止まっている。もちろん、教養体育を根本的に見直そうとする、反論の声もある。反論者は、「われわれも教養体育に含まれた意味を *Bildung* として考えている。しかし、大学の現実はそうは行かない。これはまるで卵で岩を壊そうとする愚かな考え方に過ぎない。理想だけでは食べていけない。よって、教養体育では新しい種目を紹介することに満足している」と、いつている。このような反論について、筆者は「それは違う。われわれは教養体育を陶冶的活動として理解し、実践してはいない」といいたい。本稿の目的は、彼らに対する筆者の答えでもある。恥ずかしながら、韓国の体育界には教養体育を陶冶的観点から考え、それを実行しようとする伝統は形成されていない。

ここまで、韓国における教養体育の危機と原因診断、そして解決策を述べるため、大学の行政、財政、プログラムの側面から述べた。このような機能主義的な原因診断と解決策は、結局一つ目の観点到に基づいたものであり、新しい種目を習う出発点、以前やったことのない種目の技能を覚え、楽しむものとして教養体育を捉えている。また、このような考え方では教養体育の活性化を講座数の確保として捉えている。そのため、一つ目の観点到では教養体育が学生の体力水準を向上させ、ストレス解消を助け、その結果として成績を高めることにどれくらい貢献できるのかが重要になってくる。しかし、これらの相関関係や因果関係を明らかにすることは難しい。そのため、教養体育は危機に陥っている。

ところが、筆者はこのような観点到（一つ目の観点到）を批判するつもりはない。また、理想をもとに現実を判断し、プロクルステスの寝台（Procrustean bed）論議の中で見られるように、理論を正当化するために理論という暴力を使っているわけではない。ただ教養体育を見直す、より教育的にふさわしい観点到があるのか。あればどのようなものなのかを大学体育に対する愛情を持って探り、解決策を提案したいだけである。また、スポーツ教育学を研究する一人として教養体育の教養的性格を理解し、筆者なりの見解を示したい。また教養体育のアイデンティティとその理由を示したい。

しかし、現実から考えれば、いくら新しい主張をしても、今の状況は変わらないかもしれない。それほど、韓国の大学財政は劣悪している。財政だけではなく、認識も同じである。また、韓国の行政家や大学の教員らは、教養体育を理解する一つ目の観点到に止まっている者が多い。だから変化は極めて難しい。もちろん、すべての教員が同じだとは言いえない。絶対というのは存在しないからである。特に不完全な世の中では言うまでもない。一つ目の観点到の教養体育の限界を超え、二つ目の観点到、そして三つ目の観点到を実現しようと思う教員もいるはずである。つまり、ゲームを超え、マナーと陶冶（*Bildung*）としての教養体育を企画・実践し、結局成し遂げる方も必ずいるはずである。

ここでもう一度、冷静的に現実を考えてみると、教養体育授業がこのような性格を帯びることを拒否する学生もいるはずである。しかし、多くの学生はストレス解消、課題なしでただ体を動かすこと、楽しいゲームであってほしいと思うかもしれない。人の趣向は多様であり、その多様性を満足させるためには多様な教養体育が必要である。皆が聖人君子や窈窕たる淑女になる必要はないからである。そのため、すべての教養体育が陶冶的教養体育ばかりになってはいけないと思う。映画にも A 級、B 級、C 級の映画があり、人々は自分の好みによって選択している。

それにも関わらず、一つは確かである。それは、大学体育の理想、教養体育の理想は、原則的にいえば、Bildung 体育になるべきだという見解である。教養体育の学期別実践は教員の意図や力量によって、また学生たちの要請や希望によって変わるものである。最悪の場合、ただ遊ぶ時間としてバドミントンのラケットを振り、プールで泳ぎ、サッカーボールをひたすら蹴る時間になる可能性さえもある。しかし、そのような内容の授業が展開されても、その底辺には学生を全人的完成（whole person）へと導く、陶冶的過程として捉える根本は変わらないでほしい。微かにでもその志向は残っているべきである。食物には光を捜し求める屈光性や水を捜し求める屈水性があるように、教養体育は種目に関わらず、屈 Bildung 性を持つべきである。そうなったときにようやく大学で広げられる体育講座は教養体育と呼べる。

現場実践の観点から教養体育をみる、この三つの観点は水平的関係としても、垂直的關係としても考えることができる。前者からみれば、多様な種目が三つの観点に基づいて提供できる。たとえば、バスケットボール、サッカーは一つ目の観点、ヨット、乗馬は二つ目の観点、テコンドは三つ目の観点から提供できる。そして、後者からみれば、一つの種目に三つの観点を段階的に設定し、三つのレベルが体験できるように提供することも可能である。たとえば、テニス I、II、III を開設しレベル別に合わせてゲーム、マナー、陶冶中心の授業を設定することができる。このような考え方は可能ではあるが、韓国の大学では後者の方法で、教養体育のプログラムを構成し、運営する余裕がある大学はない。前者の場合も同様で、多様な種目を設けることも簡単ではない。前者も現実的ではなく、教養体育はこの両極端の中間を選択するしかない。つまり、学校の事情に合わせて、前者か後者に近いものを選択するしかないのは悲しい現実である。

## 6. 運動素養と運動享有力

前者を選んでも後者を選んでも陶冶性が維持できるようにしてほしい。ところが、そのためには、どのような措置が必要なのか。どうすれば大学の体育が教養体育として位置づけられるのか。最後に、筆者の考えを簡単に述べたい。

陶冶 (Bildung) としての性格をもつ教養体育は、大学生たちに運動素養 (sport literacy) を育て、運動享有力を備えさせるべきである。つまり、大学生たちが水泳やバレーボールを習った後は、水泳素養とバレーボール素養が身につく、その結果として水泳享有力やバレーボール享有力が増えるべきである。この運動素養と運動享有力はコインの両面のようなもので、二つそろって一つである。これらは教養体育を Bildung 体育として維持してくれる要素である。そして、運動素養と運動享有力は教養体育の教養的性格を確保してくれる。つまり、運動素養と運動享有力は大学の教養体育の教養的アイデンティティを確保してくれる。運動素養を授業目標とし、運動享有力が育むようにすれば、教養体育として位置づけられる。

運動素養とは、運動を正しくし、正しく理解する資質であり、能素養 (体育を正しく行う資質)、知素養 (体育を正しく理解する資質)、心素養 (体育を自ら好んで行う資質) で構成されている。たとえば、大学生がバスケットボールを習えばバスケットボール能素養、バスケットボール知素養、バスケットボール心素養が身につく。つまり、技能的にできるようになり、知性的に理解し、情動的な情熱を描くことになる。もちろん、これは初歩的なレベルにおいてである。すべての運動素養はこのようにして開発される。「家造りらが捨てた石がすみの親石となった」(マタイ21章42節) という聖書の言葉のとおりである。教養体育は大学生の体と心に、このような小さな種を蒔くものであり、この種は運動素養である。運動素養が身につくと、それを活用して運動享有力を発揮することができる。たとえば、車にエンジンがかかり、バッテリーが動くとき電気が流れ、オーディオやナビなど、多様な機能が使えるようになることと同じである。バスケットボール享有力は、バスケットボールをいろんな方法で楽しむ能力をいう。具体的にいえば、バスケットボールゲームや競技観戦をはじめ、絵を描いたり、バスケットボール関係の映画を楽しんだり、バスケットボール監督の自叙伝を読むことも含まれる。つまり、運動や知識を楽しむことであり、能と知と心でバスケットボールを享有することである。

そして、このような人は自分が持つ、すべての素質や力量を活用し、より複雑で水準の高い享有を導き出すことができる。たとえば、国家代表サッカーチームの応援団をインターネット上で募集し、外国で開催される A マッチの試合の応援を行ったり、プロ野球チーム所属選手の素晴らしい新記録を記念する詩を書いたりすることである。車にエンジンがかかり、電力が供給されると、多様な機能が作動するのと同じである。運転者はそれを総合的にコントロール・活用し、もっと楽しいドライブになるようにする。教養体育をとおして涵養された運動素養と運動享有力は、大学生が自分の人生というドライブを幸せにさせる原動力といえるものである。

運動素養を重ねること、そして運動享有力を高める努力とその過程自体が陶冶である。身体活動をとおして運動能、運動知、運動心を涵養し、これによって運動能享有力、運動知享

有力、運動心享有力を深化させる努力とその過程自体が体育における陶冶である。運動素養と運動享有力は単純に運動能力を向上させ、結果的に試合競技の良い結果を生むことに留まらない。運動素養と運動享有力はそれより包括的で全人的な概念である。能知心を包括し、智徳体を統合する。そして、運動享有力という概念は、すべての種類の体験と学習を含む。つまり、能享有だけを重視するのではなく、能享有、知享有、心享有のすべてをバランスよく重視する。運動をするのは運動を味わう一つの方法にすぎないからである。手足、頭、心で総体的に体験し、それを内面化することによって、われわれの智徳体は一つになって成熟し、完全な自我として陶冶することができる。教養体育をとおして、自分の体や心に重なった運動素養は静的な状態と呼ぶことができる。運動素養は運動をして、知って、楽しむという特徴がある。だが、じっとしているときの運動素養は静的なものである。一方、運動享有力はそれが発揮されると動的なものになる。また、じっとしているときは能素養であるが、実際バスケットボールをするときは能享有力になる。ただ何もしないときは知素養であるが、バスケットボール監督の自叙伝を読んだり、討論するときは知享有力になる。そして、普段われわれが持つ好きな心は心素養であるが、バスケットボールチームが好きで記念品を買い集めたり、地方へ応援に行ったりすると、心享有力になる。

このように、バスケットボール享有力が深化するとするほど、バスケットボールを直接楽しむ形態の享有力とバスケットボールを媒介に自分の人生の多様な領域から楽しむ享有力が身につく。バスケットボールのマンガ作家、プロバスケットボールチームの職人、バスケットボールの専門レポーターとしてはもちろん、一般人として生活の中での応援、観覧、収集、ボランティア活動など、多様な方法でバスケットボールを享有することになる。つまり、教養体育を学ぶことによって、自分を成長させ、自分の人生をより豊かに嗜むことができる資質が生まれるのである。

## ま と め

生活に押され失った人生は、どこに行ったのか。

Where is the Life we have lost in Living?

知識に埋もれ失った智慧は、どこにあるのか。

Where is the wisdom we have lost in knowledge?

情報に埋もれ失った知識は、どこに行ったのか。

Where is the knowledge we have lost in information?

(T. S. Elliot, The Rock)

これはイギリスの詩人、T・S・エリオットの叫びとして有名なものである。エリオットによれば、われわれに残されたのは智慧 (wisdom) ではなく、知識 (knowledge) であり、場合によっては残念ながら情報 (information) だけである。われわれは毎日の目先の生活に追われ、失った自分の本来あるべき人生を後悔しているのではないか。エリオットは価値あるもの (根本的なものへの追求) を忘れ、目先の利益ばかり考えている現代人に警告している。彼は本来追求すべき中身を捨て、殻ばかりのもの (本質ではないもの) に執着する人間の愚かさに警鐘を鳴らしている。しかし、われわれは相変わらず智慧よりは知識、知識よりは情報を欲しがっている。これは人間の愚かさである。われわれが大学で学ぶ本来の目的は、これらから離れるためではないか。しかし、大学でさえ人間の愚かさは繰り返されている。

そして、大学における教養体育も同じ状況に置かれている。ゲーム体験 (一つ目の観点)、マナー習得 (二つ目の観点)、全人的陶冶 (三つ目の観点)、この三つの中でどれを得て、どれを捨てればいいのか。しかし、われわれは目先のことを追い続けながら、もっと大事なものを、根本的なものを失いつつある気がする。教養体育の再調整の結果としてわれわれに何か残されたのか。われわれは教養体育の性格について、エリオットの叫びのように、智慧の代わりに知識、知識の代わりに情報という下向的な選択をしているのではないか。教養体育は、どのような点において、真の教養教育といえるのか。また、教養体育における教養とは何か。大学における体育が教養教育として堂々と認められるためには、このような質問に繰り返し、問いかけるべきではなかろうか。そして、われわれは、それについて答え続けるべきではなかろうか。本稿は、その答えの一つであった。だが、恥ずかしながら筆者の答えも下手なスケッチに過ぎない。次はもっと良いスケッチができるように努力したい。しかし、それがいつかは分からない。最後に、教養体育の本質についてもっと明瞭かつ賢明な答えを出す方々が次々と登場してほしいと願う。

Summary

Basic Physical Education as Liberal Education

Kim Hyunyong and Euichang Choi

This article is a translation of “Basic Physical Education as Liberal Education” (교양으로서의 체육교육) which presented by Professor Euichang Choi of Seoul National University as the reality of Physical education in Korean universities. Joint Doctoral Program in Advanced Physical Education and Sports for Higher Education in University of Tsukuba held Japan, Korea, Taiwan University Physical education research on February 2019. In this forum, Professor Choi introduced the reality of physical education in Korean universities and showed its solutions. This article is considered to be a clue to grasp the actual situations of physical education in Korean universities.